

日本の歴史 28

『江戸が東京になった日：
明治二年の東京遷都』

佐々木克著（講談社選書メチエ 講談社 2001）

本書の請求記号 210.58||Sas

稲垣 宏行

変革を行うには多くの困難が伴います。特に数百年も前に生じた変革については、我々は実際に見た訳ではなく、後から見ているため、そこに何の滞りも無かったのだと錯覚し、困難であった部分を軽視しがちです。

江戸城が開城した慶應3（1867）年頃、大久保利通ら明治政府の首脳が計画した江戸遷都も、実現までに多くの障害と試行錯誤がありました。しかも、当初は大坂（現大阪）が有力で江戸はまだ候補に挙がっていませんでした。当時、大坂は商業・流通の中心地で、諸侯を統制する上でも利便性のある地だと考えられていたからです。

幕末期、京都には多くの武士が集い政治上の重要拠点となりました。しかし、京都ではなく大坂を首都に定めようとしたのは、新しい政治体制を組織するために従来の場所から離れる必要があったからです。ところが、この大坂遷都論に触発される形で、驚くことに幕臣の前島密らが江戸遷都論を大久保に上申したことが、江戸が首都となるきっかけになりました。彼らが江戸を推薦した理由として、蝦夷地の開拓を視野に入れていることや、その当時の江戸が人口や土木・建築技術において世界の首都と見劣りしないものであったことなどを挙げています。大久保らは今後の徳川家の処分に加えて、明治政府内部から江戸遷都論が少なからず出たこともあって、江戸を首都とする方向に傾いていったようです。

本書で最も重要と考えられるのは、明治政府が江戸遷都について明言を避けていた点です。当初この計画は東にも都（首都）を拵える、すなわち両都論として主張されていたのです。この両都論は前島密と同じく江戸遷都を支持していた佐賀の大木喬任、江藤新平が主に唱えていました。明治政府は計画の布石として明治天皇に江戸への行幸を促しました。しかし、現実には岩倉具視ら公家たちからの慎重論が強く、公表にも難儀をしたと言われていました。ただ、岩倉らが京都への配慮から行幸に難色を示していたのに対し、三条実美のように行幸に積極姿勢

を示していた公家もいたようです。最終的に三条行幸を支持する公家の存在もあって、3ヶ月かかって明治元（1868）年9月頃、実現にこぎつけましたが、遷都自体については、明治2（1869）年に皇城とした江戸城に天皇が入城した後も明確な声明はなく、なしくずし的に江戸（1868年7月17日より東京に名称変更）を首都にする形となりました。

遷都自体は奈良時代、平安時代にも行われていたことで、前例の無い事例ではありません。しかも、明治政府は徳川幕府を倒して勝者となった以上、躊躇う必要はなかったとも考えられます。それでも遷都という表現を避け続けてきた理由は、一千年以上の伝統を持つ京都に対して憚りを感じていたからだだと著者は述べています。

このように変革は、その内容が斬新で、旧来の制度や慣習などを大きく変えてしまうものほど実行は困難になります。後の四民平等や徴兵制度に見られる武士階級の撤廃の場合、武士の強い反発を招き、最後は西南の役に見られる戦争に発展しました。

現代も、政治家によって多くの社会・政治改革案が提唱されていますが、反対勢力の抵抗などで成立を見ずに頓挫したものもあります。また、実施に持ち込めても、それが理想とは違い、地域や国民の利害にそぐわぬ結果に終わった改革も存在します。したがって、いつの時代でも改革は現状を大きく変えてしまうことが前提であり、立案前に広範な視点からの検討を積み重ねることが求められます。

本書の主題は東京遷都に搾られています、その中で述べられた変革の困難は、日本史全体に当てはまることだと思います。そして、その歴史の中で苦慮を重ねてきた先人達の行動を見ていくことによって、現在の政治改革においてもなすべきことが見えてくるのではないかと考えます。

いながき ひろゆき(司書・情報サービス課)